

# 福聚山史

篠原 重一 文  
及川 一普 編

半世紀以上も前の昭和二十年、日本は未曾有の戦禍の中にあつた。そして、この福聚山常円寺も今や炎につつまれようとしていたのである。

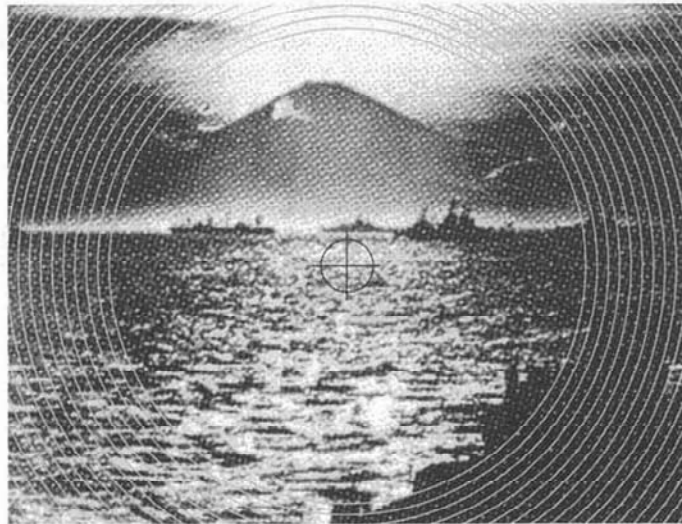
三月二十日の下町を中心とした大空襲の後、山の手の住民の疎開にも拍車がかかり、建物強制疎開は全部各地に及び、街道沿い・鉄道沿い・工場の周囲等の至る所がその対象となり、我家も信濃町から中野区仲町（現在の青梅街道鍋橋の手前右側、中野警察裏仲町小学校の隣に位置する）に移転した。その当時の常円寺近辺の情景を、かつて東京医学専門学校（現在の東京医大）の学生であつた作家山田風太郎が『戦中派不戦日記』の文中に次のように書いている。

昭和二十年四月二日（月）、桜ほころびしものあれど、すでに疎開除き去せられて荒涼たる空地。また人去りて無人の町となれる新疎開区域など、甲州街道の一带、実に以前の町を回顧するよすがもなし。学校にゆく。入学試験合格発表せられあり。級友らのゆくさをきくに、淀橋病院（現在の東京医大病院）近くのはずなりと。ゆくになるほどみな淀橋図書館（常円寺斜め右側、現在の新宿警察附近）に屯せる形跡あり。さらに尋ねゆくにこのあたり一街区、

ゆけどもゆけども悉く疎開指定地にして、右側（常円寺側）の店舗すでに人なく荒廃し、綱曳きて壊す兵の群、瓦投げ落とす人夫の群、建具運ぶ学生の群、さらに戦車の姿すら至るところに見ゆ。あがる物音、砂煙の中に、老婆、子供、

男、女、或いは兵、人夫まで略奪者のごとくその家々の中より色々の物探しては包む。今次の疎開は過去の常識を絶して大規模にして、また立退命令早急にして嚴重なれば、まだ色々の物品残りあるなり。

昭和二十年四月五日（木）、建物破壊作業。午後、柏木より本町（青梅街道中野坂上）の方へどんだん歩きみるに、どこまでいっても両側惨澹。くたびれて引返す。新宿よりガードをくぐりて柏木へ曲る角等の角（現在の都民銀行のあたり）、昨朝の爆撃にやられて余塵くすぶる。午後七時、情報局発表。小磯内閣総辞職。



常円寺は幸いにも青梅街道より引き込まれた位置にあり、建物強制疎開の対象にはならなかった。しかし、五月二十四日から三日間にわたるB29四百七十機の大規模な空襲によって、山の手は甚大なダメージを受け、昭和六年の日蓮聖人六百五十遠忌を期して建立され、東都一と喧伝されたさすがの常円寺の堂宇も灰燼に帰した。『世間虚仮 唯佛是真』と言うのに、六百年にわたり檀家によって築かれてきたのである。世間のみならず仏

さまも真実にはいらつしやらないのか、というのが当時の思いではなからうか。このとき焼け出された範囲は赤坂・本郷・澁谷・麹町・京橋・麻布・芝・世田谷・目黒・小石川・中野・四谷・淀橋・杉並の各区で、山の手の殆どが廃墟と

なった。私の父はこの空襲を勤務先である三宅坂の陸軍参謀本部（現在の国立劇場に位置）で受け、お堀端の防空壕で一夜を明かし、空襲の合間を縫って中野の家に帰るべく廃虚の街を歩いた。新宿の大ガードを通り抜け、青梅街道を行く足

取りが常円寺の前にさしかかった時、父は本堂やその他全ての建物が見るかげもなくなくなっている様を目にする。その時、本堂の柱だけが形を残していたという。その柱は一週間絶えず燃え続けていたと伝えられている。中野の我家も全焼し、憔悴した姿で疎開先の諏訪の仮家に着いた父が「お寺さんも焼けてしまったよ」と言ったのを今でも覚えている。また、空襲によって消失した直後の様子を常円寺の隣地に非難していたOさん（私の知人で現在九十一歳の女性）に聞いた。空襲の時のことを「どこで一夜を明かしたかさえ覚えていない」という。翌朝を常円寺境内で迎えたOさんの家族は、その日から多くの人たちと一緒に常円寺・常泉院の大きな防空壕の中や唯一焼け残った鐘楼堂の中で日々を送った。焼け残った塔婆を屋根や壁にし雨露をしのいだという。この体験談を話しながらOさんは幾度となく「お寺さんにお世話になりました」と感謝していた。

戦後、再度にわたる区画整理によって常円寺境内の様子も一変し、さらに西口一帯は副都心となって変貌を続けた。戦前から常円寺の前にあつた浄水場やお墓参りの際の楽しみであつた並びの大学芋のお店もいつしか街並みから消え去り、今は昔日の面影は全くなくなつてしまった。

（つづく）

本号よりこの連載を始めますが、檀家の皆様にも各々の家で伝承や記録などをお持ちの方もいらつしやると思っています。情報の提供や感想をお寄せ下されれば幸いです。次号から本論『常円寺の起立』に入りたいと思います。